イゼベル： パート2

Ⅱ列王記 9 章に至る背景

ナボテのぶどう畑の一件があった後、Ⅰ列王 22 章 1 節によると「アラムとイスラエルとの間には戦いがないまま三年が過ぎた。」とある。しかし、3 年目に再びアハブはアラム（シリア）に戦いを仕掛ける。その際懇意にしていた南のユダ王国のヨシャパテ（ヨシャファテ）（アハブ王の娘アタルヤを自分の息子ヨラムの妻にすることで南北朝の和解を成し遂げた。）。しかし、この和解工作のせいで、南王国のヨシャパテ（ヨシャファテ）は悪い影響を受けることとなる。ちなみに、アタルヤはⅡ列王 11 章を見れば分かるように、南王国ユダの王の一族全員を殺して、実権を握ろうとする。アタルヤの母はイゼベルであろうから、この母あって、この娘といったところか。

神は預言者ミカヤを送られ、アラムと戦わないように警告されるが、ヨシャパテ（ヨシャファテ）もアハブも戦いに行ってしまう。アハブは変装までするが、アラムの名もなき一兵卒が放った矢がアハブの胸当てと草摺りの間を射抜いてしまう（Ⅰ列王２２：３４）。これが神の摂理でなければ、何なんだっていう、そんな出来事。

その日、戦いはますます激しくなり、戦車の中で立って頑張っていたアハブも夕方にはいのち尽き果て、南北イスラエル軍の兵士はめいめい自分の国に帰り、アハブの亡骸は首都サマリヤに着き、葬られる。しかし、アハブの傷から出て戦車のくぼみに流れていた血は、戦車がサマリヤの池で洗われることとなり、「犬が彼の血をなめ、遊女たちがそこで身を洗った」という主の預言が実現することとなる。そして、アハブは反省したことで、神からいただけた猶予通り、きちんと葬られ、彼の代でアハブ家が滅びることはなかった。みことばがどれほど確かであり、信頼に値するかが分かる出来事だ。このようにして、イゼベルは未亡人になる。

アハブ王の死後、息子のアハズヤが王位を継承するが、わずか 2 年で屋上の部屋の欄干から落ちて病気になる（Ⅱ列王１：２）。父親も父親だったが、息子のアハズヤも・・・「Ⅰ列王 22:52 彼は【主】の目の前に悪を行い、彼の父の道と彼の母の道、それに、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの道に歩んだ。」主に病気を治していただくのではなく、エクロンの神バアル・ゼブブを頼ろうとするも、預言者エリヤの阻止にあい、預言通りに死ぬ。アハズヤには息子がなくアハブの子ヨラムが北王国の王になる（Ⅱ列王１：１７）。この後ほどなくエリヤは竜巻で携挙され、預言活動はエリシャにバトンタッチ（Ⅱ列王 2 章）。

アハブの死後モアブが謀反を起こし、北のヨラム王は南のヨシャパテ王に助けを求める。性懲りもなくヨシャパテ（ヨシャファテ）は出陣してしまい、水がなくなり、危うく全軍絶滅かと言う時に、主の憐れみで預言者エリシャが送られ、モアブを打ち破ることができた（Ⅱ列

王 3 章）。ちなみにⅡ列王 4 章はエリシャの奇蹟を多く記している。そして、エリシャが「神の人」と呼ばれているのが印象的。神の奇蹟を行なった人のように聞こえる。（預言者の仲間の未亡人が金に困った時に、器を用意させ、その器に油が注がれ、借金を返すことができた話、エリシャに宿泊先を用意してくれた子どもがいない年配のシュネムの女に息子が与えられるようにした話、その息子が死んだのに生き返らせた話、預言者の煮物に毒が入っているのを解毒させた話、わずかの食糧から 100 人もの人に分けて残りが出た話）。Ⅱ列王 5 章に入ってもエリシャの神からの賜物による奇蹟が続くが、アラム軍の長ナアマンのらい病（ツァラアト）を癒す話、貪欲になったエリシャの付き人の若者ゲハジがらい病（ツァラアト）に冒される話が書かれている。

この後、Ⅱ列王 6 章では、北イスラエルはアラムと戦うようになる。しかし、エリシャがイスラエル王に進言するので、イスラエルは幾度も難を逃れることができた。このため、エリシャはアラム軍に狙われることとなるが、主の助けで、火の馬と戦車が送られ、逆にアラム軍が恥をかく。6 章の最期の方では再びアラムの王ベン・ハダドがイスラエルを包囲し、酷い飢饉になる話が 7 章まで続き、4 人のらい病人を通して神がアラム軍を混乱させ、逃げていってしまう話が書かれている。

アラム国内でも政変が起こり、ベン・ハダデに対しハザエルがクーデターを起こし、アラムの王となるが、このことについても預言者エリシャがいくつかの預言をし、成就する（Ⅱ列王 8 章）。一方イスラエルはヨラムが王で、ユダはアハズヤが王となっていた。アハズヤの母は先に出てきたアタルヤで、このアタルヤはアハブとイゼベルの娘。北のヨラムと南のアハズヤの仲良し関係は続き、アラムのハザエル王と一戦を交え、その際に北のヨラム王は傷を受け、その病気見舞いのため、ユダのアハズヤ王はイズレエルまでヨラム王の見舞いに行く。

ちなみに、Ⅰ列王 21 章のナボテのぶどう畑事件以降の話をざっとまとめてみたが、興味深い話のオンパレードなので、一旦読み始めたら、ぐいぐい引き込まれるので、小説を読むように読み進めることができる部分です。

イゼベルの最後

Ⅱ列王 9 章

9:1 預言者エリシャは預言者のともがらのひとりを呼んで言った。「腰に帯を引き締め、手にこの油のつぼを持って、ラモテ・ギルアデに行きなさい。
9:2 そこに行ったら、ニムシの子ヨシャパテの子エフーを見つけ、家に入って、その同僚たちの中から彼を立たせ、奥の間に連れて行き、
9:3 油のつぼを取って、彼の頭の上に油をそそいで言いなさい。『【主】はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする。』それから、戸をあけて、

ぐずぐずしていないで逃げなさい。」
（Ⅰ列王19：16「また、ニムシの子エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。」神がエリヤに対して語られた命令がエリシャの預言者のともがらによって実行される。

9:4 そこで、その若い者、預言者に仕える若い者は、ラモテ・ギルアデに行った。
9:5 彼が来てみると、ちょうど、将校たちが会議中であった。彼は言った。「隊長。あなたに申し上げることがあります。」エフーは言った。「このわれわれのうちのだれにか。」若い者は、「隊長。あなたにです」と答えた。
9:6 エフーは立って、家に入った。そこで若い者は油をエフーの頭にそそいで言った。「イスラエルの神、【主】は、こう仰せられる。『わたしはあなたに油をそそいで、【主】の民イスラエルの王とする。
9:7 あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流された【主】のすべてのしもべたちの血の復讐をする。（参考Ⅰ列王 18:4 イゼベルが【主】の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を救い出し、五十人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養った――」）この他Ⅰ列王19：14でもエリヤが命を狙われていたことが分かる。「【主】のすべてのしもべたちの血の復讐」を神はして下さる。そのままにされることはない。
9:8 それでアハブの家はことごとく滅びうせる。わたしは、アハブに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまでを、イスラエルで断ち滅ぼし、
9:9 アハブの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャ（バアシャ）の家のようにする。
神がアハブの家を聖絶されることがわかる。そして、アハブより先にいたヤロブアム、バシャも聖絶されたことが分かり、アハブ家がヤロブアム家とバシャ家と同じ憂き目にあうことが分かる。
9:10 犬がイズレエルの地所でイゼベルを食らい、だれも彼女を葬る者がいない。』」こう言って彼は戸をあけて逃げた。
この時代、この文化において、遺体は丁重に葬るのが普通であったが、葬りどころか、イゼベルは当時蔑視されていた犬に食べられてしまう。そして、食べられるだけでなく、誰一人だにイゼベルを葬る者がいない、淋しい最期をとげることが書かれている。
9:11 エフーが彼の主君の家来たちのところに出て来ると、ひとりが彼に尋ねた。「何事もなかったのですか。あの気の狂った者は何のために来たのですか。」すると、エフーは彼らに答えた。「あなたがたは、あの男も、あの男の言ったことも知っているはずだ。」
Ⅱ列王9：20によるとアハブ王が神からのことばを聞いた時にエフーや家来も一緒に

いて、聞いた可能性があるので、「あなたがたは、あの男も、あの男の言ったことも知っているはずだ。」と言っているのかもしれない。
9:12 彼らは言った。「あなたは偽っている。われわれに教えてくれ。」そこで、彼は答えた。「あの男は私にこんなことを言った。『【主】はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする』と。」
仲間の家来は、状況把握ができていなかったのかもしれない。しかし、何か特別なことばをエフーが聞いたのではないかと察しているようだ。そこで、エフーは預言者の言ったことを告げる。
9:13 すると、彼らは大急ぎで、みな自分の上着を脱ぎ、入口の階段の彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、「エフーは王である」と言った。
「あの気の狂った者」と預言者のことを呼んだ舌の根も乾かぬうちに、そのことばをそのまま受け入れてエフーが王だと宣言している。以前に聞いた神からのことばを思い出したのかもしれない。それに、どうも、家来の間にヨラム王に対する不満があったのであろうことが推察される。そうでなきゃこんなにあっさり、エフーを王にしたりしないだろう。預言者のお告げを勿怪の幸いと見たのかもしれない。

一方、謀反を起こされたヨラムは？というと・・・首都にはおらず、さらに北のイズレエルに傷の療養に行っていた。南の王とともにアラムのハザエルと戦った時の傷である。
9:14 こうして、ニムシの子ヨシャパテの子エフーは、ヨラムに対して謀反を起こした。——ヨラムは全イスラエルを率いて、ラモテ・ギルアデでアラムの王ハザエルを防いだが、
9:15 ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来ていた——エフーは言った。「もし、これがあなたがたの本心であれば、だれもこの町からのがれ出て、イズレエルに知らせに行ってはならない。」
エフーは同僚の家臣に口止めをして、イズレエルにいるヨラム王に知らせないようにと言って、ヨラム王が先手を打つ前に、エフーは行動を起こす。

エフー自身は軍勢を率いてイズレエルに向かい、くしくもそこには病気見舞いできているユダの王アハズヤがヨラム王と一緒にいた。
9:16 それから、エフーは車に乗って、イズレエルへ行った。ヨラムがそこで床についており、ユダの王アハズヤもヨラムを見舞いに下っていたからである。
9:17 イズレエルのやぐらの上に、ひとりの見張りが立っていたが、エフーの軍勢がやって来るのを見て、「軍勢が見える」と言った。ヨラムは、「騎兵ひとりを選んで彼らを迎えにやり、お元気ですかと、尋ねさせなさい」と言った。
イズレエルには見張りがいて、エフーの軍勢に気づき、迎えの使者を送る。
9:18 そこで、騎兵は彼を迎えに行って言った。「王が、お元気ですかと尋ねておられ

ます。」エフーは言った。「元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。」一方、見張りは報告して言った。「使者は彼らのところに着きましたが、帰って来ません。」
しかし、迎えに出た使者はエフーの謀反に気づいても、それをヨラム王に知らせに行くどころか、自分自身も謀反に加担してしまう。どうやらヨラム政権を良しとしていなかった者は、側近にもいたようだ。
9:19 そこでヨラムは、もうひとりの騎兵を送った。彼は彼らのところに行って言った。「王が、お元気ですかと尋ねておられます。」すると、エフーは言った。「元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。」
またしても使者はエフー側についてしまい、戻ってこない。
9:20 見張りはまた、報告して言った。「あれは彼らのところに着きましたが、帰って来ません。しかし、車の御し方は、ニムシの子エフーの御し方に似ています。気が狂ったように御しています。」
エフーの軍勢が随分と近づいたので、見張りは向かってくるのがエフーに似ており、気が狂ったように車を御していることをヨラム王に報告する。
9:21 ヨラムは、「馬をつけよ」と命じた。馬を戦車につけると、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは、おのおの自分の戦車に乗って出て行き、エフーを迎えに出て行った。彼らはイズレエル人ナボテの所有地で彼に出会った。
ヨラムはさすがに何かおかしいと気づき、病気で伏していたにもかかわらず、馬を戦車につけ、ユダのアハズヤ王ともどもエフーを出迎えに出て行き、くしくもイズレエル人ナボテの所有地でエフーに出会う。
9:22 ヨラムはエフーを見ると、「エフー。元気か」と尋ねた。エフーは答えた。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。」
ヨラムは挨拶をするが、イゼベルの姦淫と呪術が盛んにおこなわれていることを指摘し、謀反の理由に挙げる。王の母イゼベルが不品行を行ない、政治の場面で呪術（偶像礼拝を伴う支配）が行われていることを良しとしていなかったように見受けられる。
9:23 それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに、「アハズヤ。悪巧みだ」と叫んだ。
エフーの謀反に気づいたヨラム王は逃げようとし、いっしょに来ていたユダのアハズヤ王にも警告するが、時遅し。
9:24 エフーは弓を力いっぱい引き絞り、ヨラムの両肩の間を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は車の中にくずおれた。
エフーの射た弓矢でヨラム王はほぼ即死状態。
9:25 エフーは侍従のビデカルに命じた。「これを運んで行き、イズレエル人ナボテの所有地であった畑に投げ捨てよ。私とあなたが馬に乗って彼の父アハブのあとに並んで従って行ったとき、【主】が彼にこの宣告を下されたことを思い出すがよい。
9:26『わたしは、きのう、ナボテの血とその子らの血とを確かに見届けた。――【主】

の御告げだ――わたしは、この地所であなたに報復する。――【主】の御告げだ――』
それで今、彼を運んで行って、【主】のことばのとおり、あの地所に彼を投げ捨てよ。」
エフーが侍従のビデカルに以前アハブ王に対する神の宣告を聞いた内容を思い出すように指摘して、それを実行するように命じる。神のことば通りにナボテの地所にアハブの子ヨラムの死体を遺棄し、主の言葉が成就する。
9:27 ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハガンの道へ逃げた。エフーはそのあとを追いかけて、「あいつも打ち取れ」と叫んだので、彼らはイブレアムのそばのグルの坂道で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。
ヨラム王が殺されたのを見たユダの王アハズヤはベテ・ハ・ガンの道（イズレエルよりは南に位置する）へ逃げたが、エフーの追跡を受ける。グルの坂道というのはメギドへの途上にあるが、アハズヤ王はグルの坂道で負傷し、なんとかメギドまで逃げたが、そこでいのち尽き果てる。一日の内に北の王ヨラムも南の王アハズヤもエフーによりいのちを落す。ヨラムもアハズヤもアハブ家の人間。しかし、違いは、南のアハズヤはダビデ王のゆえに神の憐れみがあり、亡骸はエルサレムに運ばれ先祖の墓に葬られたが、かたや北のヨラム王は、ヤロブアム、アハブの道を歩んだことで、ナボテの地所で犬死にし、神のことばが成就。
9:28 彼の家来たちは彼を車に載せて、エルサレムに運び、ダビデの町の彼の墓に先祖たちといっしょに葬った。
9:29 アハズヤはアハブの子ヨラムの第十一年に、ユダの王となっていた。

エフーはイゼベルがいるイズレエルにとって返す。
9:30 エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結い直し、窓から見おろしていた。
エフーがヨラム王を殺し、アハズヤ王に傷を負わせたことを聞いていたにもかかわらず、エフーがイズレエルに来たと聞くと、何と化粧。相当美貌に自信があったのだろうか。それとも、女王としてのプライドで、死期を予感して、死に化粧をしていたのか（牧師は後者の意見です）。もし、死に化粧なら、すぐに犬に食いつくされてしまうので、物凄い神の皮肉だ。
9:31 エフーが門に入って来たので、彼女は、「元気かね。主君殺しのジムリ」と言った。
イゼベルは門に入ってきたエフーに対し、「主君殺しのジムリ」と呼んだ。ジムリはバシャ家のエラ王を倒して、七日天下しかとれなかった男。そのジムリをアハブの父オムリが滅ぼしてオムリ家がスタートした。最後の最後まで口達者なイゼベル。死期を予感していても、女王のプライドを最後まで守っている。
9:32 彼は窓を見上げて、「だれか私にくみする者はいないか。だれかいないか」と言った。二、三人の宦官が彼を見おろしていたので、

9:33 彼が、「その女を突き落とせ」と言うと、彼らは彼女を突き落とした。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた。
エフーのクーデターにくみする者が多かったせいか、イゼベルの側近にも不満分子がいることを期待したエフーの呼びかけに答えた宦官がイゼベルを窓から突き落として殺してしまう。エフーがイゼベルを踏みつけたのは、完全な勝利と征服を人々に見せるためだっただろう。

9:34 彼は内に入って飲み食いし、それから言った。「あののろわれた女を見に行って、彼女を葬ってやれ。あれは王の娘だから。」
エフーなりに良心の呵責があったのか、一応イゼベルも王の娘なので、葬るようにと部下に命じた。
9:35 彼らが彼女を葬りに行ってみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていなかったので、
9:36 帰って来て、エフーにこのことを知らせた。すると、エフーは言った。「これは、【主】がそのしもべティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、
9:37 イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」
部下の報告を聞いたエフーは、エリヤの語った神のみことばどおりになったことを確認。

イゼベルの死後

Ⅱ列王 10 章
イゼベルの死後エフーはサマリヤにいた 70 人のアハブの子を皆殺しにし、イズレエルに残っていたアハブ家に属するものを皆殺しにした。それだけでなく、エフーを迎えに来たレカブの子ヨナダブと手を組み、バアルの預言者や信者を皆殺しにした。ちなみに、このレカブの子ヨナダブだが、エレミヤ書 35 章に出てくるレカブ人ヨナダブだと考えられる。

しかし、ここまでしたエフーもイスラエルの民に偶像礼拝をさせたヤロブアムの罪を離れることがなかったことは残念な事である。やはり北王国の王の限界か？